

平成 26 年度 地（知）の拠点整備事業
《プロジェクト活動報告書》

教員養成学部における国際交流戦略 ～グローバル資質の育成

平成 27 年 3 月
島根大学教育学部

平成 26 年度 地（知）の拠点整備事業
《プロジェクト活動報告書》

教員養成学部における国際交流戦略

大学COC事業内プログラム申請時実施計画書

「マレーシアの学校教育・社会環境体験学修プログラム」

御園真史・熊丸真太郎 … 4

「NASA・学校教育・教員養成教育研究プログラム」

原丈貴・深見俊崇・百合田真樹人 … 10

「NASA・学校教育・教員養成教育研究プログラム」～学生レポート～

太田絵理・原田扶未子・武田健太郎・塚田大樹・須貝裕貴 … 18

「韓国パジュ英語村研修プログラム」

大谷みどり … 28

「ミシガン州立大学・島根大学協働学修事業」～双方向プログラム:「受けいれ」と「送りだし」

香川奈緒美 … 32

大学COC事業内プログラム申請時実施計画書

※ 学部の国際連携事業は、平成25年度から大学COC事業プログラムとして位置づけられており、毎年度実施内容を計画書にして示したうえで予算を申請して実施する。

実施計画書（プロジェクト分）

事業名	教員養成学部における国際交流戦略—グローバル資質の育成—		
総括責任者	教育学部 初等教育開発講座 准教授 百合田真樹人		
戦略名称	戦略 3-1, 戦略 3-2	中期計画番号	I-1-(1)4 , I-3-(1)2 , I-3-(2)1, I-3-(2)2
<p>〔事業概要〕</p> <p>本事業の展開を通して、地域の教員養成基幹校としてのミッションに応え、本学のCOC機能を強化するとともに、本学の教育研究活動の国際的プレゼンス向上につなげる。さらに国内的にも特色のあるプログラムを継続的に実施することで、山陰地方の教員養成基幹校としての魅力の向上と地域社会への貢献の具現化とを図る。</p> <p>そのために、(1) グローバル時代に対応した学校教育の担い手に求められる具体的な資質（グローバル資質）と、その資質をローカルな場で展開する能力を育成し、山陰地方の学校教育の質的向上に寄与する。さらに、(2) 本事業で行なう学生指導・支援を通して、本学の若手教員がグローバル視点を獲得する機会を戦略的に提供し、国際的な教育・研究に参画する機会の向上を図る。上記2つの目的をもって行なう本事業は、(3) 本学教員の資質能力向上（FD）による教育改善を通して本学及び山陰地域の課題を克服し、大学及び社会への本質的貢献を具体化することを目的とする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>グローバル資質： 英語及び外国語コミュニケーション力、異文化理解力、また他者視点から自文化・自国の教育制度や教育観を相対化する力、さらにこれらの能力をもとに社会に主体として参画する市民性を指す。</p> </div> <p>プロジェクト1年目の実績を踏まえ、以下のプログラムを継続、発展させるとともに、プロジェクト成果の定量的・定性的な評価を実施する。</p> <p>1. 学校教育研修プログラム：アジア</p> <p>教育学部の学生、教員（含、附属学校）を経済成長著しいアジア諸国に短期派遣し、その学校現場を観察研修する。特に過去10年以上に渡って経済停滞が続いているわが国の教育・研究における視点や世界観を相対化することによって、グローバル化によって変化する社会に教育・研究を通して建設的に参画する意識の創出を図る。さらに諸国のグローバル化への対応の在り方をつかみ、本学及び地域のグローバル化に対応した教育の在り方の検討と実践につなげる。また、わが国と異なる英語教育モデルを発見することによって、学生や現場教員に対して英語教育実践力の向上への意識づけをおこなう。</p> <p>この取組では教育委員会等との連携を図り、山陰地域の現職教員にも機会を提供するとともに、本学学生及び教員との討議をとおして学びの多様化と質の向上とを保証する。</p>			

2. NASA 研修・アメリカの理数工学教育・学校教育研修プログラム

NASA が主催する理数工学教育の研修プログラムに教育学部の学生，教員（含，附属学校），及び山陰地域の現職教員が参加し，研究者及び米国の現職教員と理数工学教育をテーマに，英語コミュニケーションを用いて学ぶ。このプログラムに米国の大学及び学校教育現場を訪問し，教育実践及び教育研究についての観察・意見交換・交流を含む研修を実施する。さらに，ミシガン州立大学・テキサス大学などと相互訪問を並行実施し，教育効果の相互性を保証しつつ，国外研修に参加することができない本学の学生にも米国の大学の授業を受講する機会を用意する。これら一連の取組を通して，本学における英語コミュニケーションの実践の場を保証し，講義をとおした米国の学生との討議によってグローバルな視点を獲得する機会と場を増やす。

3. 教員養成・教師教育のグローバル化プログラム

浙江大学，釜山教育大学校，テキサス大，ミシガン州立大等の交流協定校及び協力校を中心とした海外の教員養成機関，高等教育機関と連携して，教員養成教育及び教師教育のグローバル化に向けた実践と研究に協働して取り組む。また協定校及び協力校がわが国でおこなう正規講義と組み合わせ，本学学生に国外の大学の正規講義を本学内で受講する機会を用意することで，取り組みの費用対効果の向上を図る。取り組みについては国内外の学会発表などを通して発信するとともに，山陰地域の教員養成と学校教育現場への成果の還元を図る。

〔目的・緊急性・必要性〕

【緊急性・必要性】 今日，経済のグローバル化，IT の発達によって，人やモノ，情報の国境を越えた交流がますます盛んになる一方で，ナショナリズムによって隣国への嫌悪や敵愾心が一気に過熱する現象も屢々見られる。かかる時代にあって，学校教員がグローバル資質を備え，未来責任志向の公教育を担うことは喫緊の課題となりつつある。とりわけ，東アジア諸国と一衣帯水の位置にある山陰地方の COC にとって，この責務は一段と重要であるといえよう。このことはまた，東アジア諸国，とくに近隣の韓国や中国のみならず，我が国と緊密な交流関係にあるアメリカにおいても同様に取組みられなくてはならない課題でもある。

【目的】 この課題に対処するため，教育学部は，従来の国際交流の実績や取組みを再編統合し，より包括的なプロジェクトを実施することにより，学生と現職教員のグローバル資質育成をめざすことにした。山陰地方の教員養成基幹校のミッションとして，グローバル化時代にふさわしい資質・能力を備えた教員を地域に輩出するとともに，東アジアとアメリカの交流協定校を中心に，研究交流もおこない，教員養成機能をさらに高度化する。

〔期待される効果〕

本プロジェクトによって期待される効果は，本学教育学部のミッションである山陰地

方の教育力アップに貢献できる点に集約される。より具体的には、以下のとおりであり、これらの成果は結果的に本学のプレゼンスを強化する。

1. グローバル資質及び、高度な英語能力の必要性について実感をともなった理解をもつ教員を養成すると共に、グローバル資質及び英語能力の向上のための具体的かつ現実的なカリキュラム・ペダゴジーを展開する。
2. 現場教員のグローバル資質の育成と教育力の向上を目的に、地域の教育行政との具体的・建設的な連携の構築に寄与する。
3. 本学の交流協定校を中心に、学生と大学教員の派遣と受け入れを定例化でき、相互に異文化理解力を向上させるとともに、自国の教育制度や教育観を相対化する視点を獲得できる。双方の大学教員にとっては、FDとして学部教育の改善にもつながる。
4. 新しいグローバル化時代に対応できる資質・能力を備えた教員養成に関して、国際的なプロフェッショナル・スタンダード研究に資するのみならず、わが国の教員養成カリキュラム改善に対しても説得力ある提言ができる。

「マレーシアの学校教育・社会環境体験学修プログラム」

教育学部数理基礎教育講座 准教授 御園 真史
 教育学部初等教育開発講座 准教授 熊丸 真太郎

1 プログラムの概要

プログラムのねらい

本プログラムは、アジアで学校教育体験、教育環境視察を行うことによる、学生及び教員のグローバルな視点や感性の獲得と教育観の相対化を目的とする。「欧米化」でない本来の意味での「グローバル」な視点をもつ学生、教員の増加と欧米を相対化しうる教育観の獲得を志向するプログラムである。

日程

2015 年 1 月 16 日(金)～22 日(木)

日 付	概 要
1 月 16 日(金)	出雲空港→羽田空港
	羽田空港→成田国際空港
	成田国際空港→クアラルンプール国際空港
1 月 17 日(土)	クアラルンプール着、現地研修(1) 現地インストラクショナル・デザイナーと懇談
1 月 18 日(日)	現地研修(2) 社会文化施設見学(クアラルンプール近郊)
1 月 19 日(月)	現地研修(3) 社会文化施設見学(マラッカ)
1 月 20 日(火)	現地研修(4)、マラヤ大学 AAJ 見学
1 月 21 日(水)	現地研修(5)、現地高校見学
	クアラルンプール国際空港→成田国際空港
1 月 22 日(木)	成田国際空港→羽田空港
	羽田空港→出雲空港

内容

現地の学校訪問、文化施設等の視察

参加者

教員：御園 真史(教育学部数理基礎教育講座准教授)

熊丸 真太郎(教育学部初等教育開発講座准教授)

学生：4 年生 1 名(数理基礎教育専攻)、大学院生 1 名(教育学研究科教育内容開発専攻)

2 主なプログラムの内容

1) マラヤ大学予備教育部日本留学特別コースの見学
マレーシアの推進する Look East 政策の一環として、マレーシアからわが国の大学への留学を志す生徒に対しての予備教育がマラヤ大学で行われている。この予備教育では、数学、理科、日本語等の教育が日本語で行われている。この事業はマレーシアとわが国の国家間事業であり、マラヤ大学内に Ambang Asuhan Jepun (日本文化研究館;通称 AAJ)と呼ばれる施設が、わが国の資金援助のもとに建設されたほか、教員は日本国内の全国の高等学校から優秀な教員が集められて指導にあっている。平成 25 年度までに、3,480 名ものマレーシア人がこの AAJ を巣立ち、わが国へ留学した。

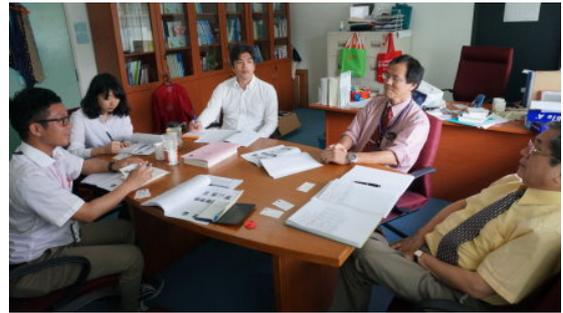
本研修では、AAJ の渡辺淳一団長にプロジェクトの趣旨などのお話をお伺いしたのち、この予備教育で行われている理科と数学の授業を実際に見学させていただいた。授業は、優秀な先生方が集められていることもあり、どの授業も、熱気があふれ、指導内容や方法も工夫されており、大変興味深いものばかりであった。こういった指導法そのものから勉強になるところが多いのはもちろんだが、何よりも日本語とは異なる第二言語で学ぶということのハードルとそれを乗り越えるための手立ては、学生にとっても新鮮に映ったと思われる。自らが将来母国語で指導する際に、学習内容を理解するための言葉の問題が確かに存在する。しかし、わが国で指導している際には、それに気付かないが、AAJ での授業を観察することで相対化することができると考えられる。

2) Sekolah Sultan Alam Shah Putrajaya の見学

最終日に、Putrajaya 市にある中等教育学校である Sekolah Sultan Alam Shah (以下、SAS)を訪問した。

SAS では、外国語として日本語も開講されており、わが国に対する関心も高い親日的な学校である。SAS はマレーシアの国内では、エリートの男子校で、生徒たちは寮に住みながら、生活を送っている。

SAS では、校長のお話を聞いたのち、数学や日本語教育の教員を交えながら、わが国の学校教科書を紹介し、マレーシアの学校教育とわが国の学校教育についてディスカッションを行った。その後、数学等の授業も参観させていただいた。学生たち自身がつ学校や教育についての概念は、自分の育ってきた環



AAJ での団長先生との懇談



AAJ での授業観察



SAS の校長先生から記念品授与



SAS での学校教育についてディスカッション



SAS での授業観察

境に依存するところが大きい。しかし、それは非常に限られた狭い領域であって、その中のことを当たり前だと思ってしまうことの危険性は大きい。実際に、異国の学校を訪問し、教師や生徒の振る舞いを見ることによる学びはかなり大きいものと思われる。

3) インストラクターとの懇談

現地のインテル社でインストラクショナル・デザイナーをされている Safiza Markhayu Yusof さんと懇談し、彼女の仕事の内容や、マレーシアの教育・文化などについてお話していただいた。特に、以前、初等・中等教育で理科や算数・数学などを英語で指導するという政策が行われていたが、その難しさから、その政策が見直されたという点など、大変興味深い情報を得ることができた。

4) 現地社会文化施設の見学

マレーシアは、非常に多様な人、宗教、文化が混在している。教育を考える際に、このような歴史を含めた背景を知ることは重要である。そこで、イスラム教に関係するモスク、ヒンドゥー教に関係するバトゥ洞窟、世界文化遺産にも登録されているマラッカなどを訪問し、そこで、どのように人々が生き、子どもたちがどのようにかかわっているのかを実際の眼で確かめた。

3 プログラムの成果と課題

1) プログラムの成果

(1) 参加学生から見た研修の成果

参加した学生の報告書から、本プログラムを通して3つの点について学生たちが気づき、考えたことがうかがえる。下記の記述は、学生の報告書に記されたものである。

【文化の多様性】

「日本では宗教にあまり触れる機会がなく、日本以外に訪れたことがある国でも、オーストラリアではキリスト教、タイでは仏教と1つの国で1つの大きな宗教があり、それを中心に街が構成されていました。しかし、今回のマレーシアでは宗教が混在していることを考えると、何となく不思議な感じがします。「宗教とはなにか」と言われても日本人である私にはぱっとイメージできるものはありませんが、おそらく、彼らの生活の基盤となっている非常に重要であり、絶対的なものではないかなと思います。」

「世界に目を向けるとその宗教同士の対立であったり、宗教内部での対立などで紛争や戦争が起こっているというのが現状の世の中で、4つの宗教がそれぞれ自分の信じるものを大切にしつつ、他の宗教も尊重しているからこそ、今の均衡の保っているマレーシアがあるのだなと思いました。(…略…)「他(人)を尊重する」とはよく言いますが、なかなかそれを実行するのは難しいと思いますが、マレーシアに行ったことによって、それを肌で感じ取ることができると思っています。今後はそれを生徒にどのように伝えていくのかということを考えていきたいです。」

【論理的思考力の育成】

「そこ(註:マラヤ大学予備教育部日本留学特別コース(以下、AAJ))で勉強する生徒は高校で、第一

第二言語のマレー語や英語で一度学習している内容を日本語で授業をもう一度受けなおすということになります。その授業を見たり、そこで勤めておられる先生方のお話を聞いて思ったのは、「日本語でどのように思考するのか、またアウトプットするか」という点に重点を置いて指導されているのだなと感じました。生徒は一度学習している内容なので、学習内容的にはそんなに難しい内容ではないと思います。しかし、それを使い慣れていない日本語で考え、それを発言したり、説明したりすることはとても難易度の高いことだと思います。」

「日本語が得意でない学生だからこそ、(註:論理的に説明することを)意識的に指導している可能性もありますが、いずれにしても、日本語が第一言語の日本の生徒にとっても、数学・理科の学習においては重要であることに違いはないと考えているので、今後教師となり指導する際に意識的に指導していきたいです。」

【日本という国】

「AAJから日本の大学に留学する学生の数は年々減少していて、その原因はAAJの先生方によると日本の経済が陰りを見せ始めているからのようです。(…略…)私が思うのは、日本という国の価値は経済的な国の力で決まってしまうのかなということです。経済は国を支えていくうえでももちろん大切で重要なのは理解しています。しかし、日本に来たいと思う学生の多くは経済的なものだけでなく、大陸から離れているために独自に発展した伝統的な文化、和を重んじ規律正しい日本人の性格、犯罪やテロの少ない安全性などを評価している人も多いと思います。私は教員になるので国の経済を変えることはできません。しかし、伝統的な文化を守るために自分の地域にあるものを大切にするよう指導したり、あいさつや礼儀という当たり前ができることを当たり前できるように指導することなど、教員としてできることはたくさんあると思います。」

(2) マレーシア社会を通じた社会認識の相対化

マレーシアは、歴史的に日本との関係が深い。ただ、同じ東南アジアのシンガポールやベトナムと比較すると、一般的にはよく知られている国ではない。参加した学生にとっても、マレーシアという国は、自然豊かである、日本と貿易を行っている、経済的に「支援」や「援助」している程度の認識であったようである。

しかしながら、マレーシアは、特に本プログラムで訪れたクアラルンプールでは顕著であるが経済発展に伴い、都会的な街並みが随所に見られる。実際に訪れることで、参加した学生のマレーシアに対する認識は大きく変化したようである。

また、マレーシアは、宗教的・文化的に多様な人々からなる国である。そのため、様々な場面で宗教や民族固有の文化に配慮していることに学生たちは気づいた。日本では、日本で生まれ育つ人々を「日本人」と一括りにしてしまう傾向がある。しかし、マレーシアでは、同じマレーシアに住む人々でも、宗教的・文化的背景に基づき多様であることが前提となっている。参加した学生は、そうした多様性を前提として社会を形成し、維持していくことの難しさに加え、日本が本来多様な人々からなるにも関わらず、画一的な人々から成立しているとみなす傾向にある自らの社会認識についても、現地高校やマラヤ大学の教員等との意見交換の中で気づいたようである。

教員養成段階にある学生にとって、学校教育において児童・生徒を教育するうえで、自らの社会認識

がいかなるものであるかを認識することは重要である。今回のプログラムは、参加した学生が、これまでの自らの社会認識を相対化できたことが重要な成果であるといえよう。

(3) 日本の学校教育の相対化

マレーシアの学校教育について、現地高校やマラヤ大学の訪問・見学や、各訪問先での教員との意見交換は、参加した学生にとって大きく二つの点で、日本の学校教育を相対化させた。

一点目は、学校教育の社会的な役割である。マレーシアでは進学先の決定にあたり、生徒の興味・関心や希望より、成績に基づく政府の配分が優先されるという。確かに、日本でも1980年代までは「偏差値教育」と呼ばれ、成績が進路指導の最優先事項であった。マレーシアの特徴は、国の発展のための教育という理念が明確なことにある。優秀な生徒を、理工系の大学に進学させたり、国外に留学させたりすることで、マレーシアに発展をもたらそうという教育の社会的意義を明確に意識した進路指導が行われている。もちろん、こうした方針への賛否は分かれるが、マレーシアの学校教育についての理解を深めるにつれ、日本の学校教育では「学校教育の社会的意義」が意識されていないことに改めて気づかされていた。

二点目は、教科指導の具体である。本プログラムに参加した学生は、数学教育を専攻とする学生であったため、教科指導面でも気づかされることがあった。マラヤ大学の日本の大学への留学を目指し、日本語で数学や理科について学ぶコースでは、日本の高校の授業で当然のように用いる「言葉」が、学生には通じにくい。彼らは、すでにマレー語や英語で数学を学んでおり、数学の能力に問題があるわけではない。彼らは、日本語という異なる言語で数学を改めて学ぶため、教員がそうした学生の事情に応じた言葉を選択し、授業を進めていた。そうした授業を見学することで、参加した学生たちからも、「(日本で数学を学ぶ)生徒たちの中にも、数学的な能力ではなく、自分たちの「言葉」が通用していないため、理解が難しい生徒がいるのではないか」という気づきをもたらされた。「いい授業」のためには、教材研究や指導法の開発という視点だけでなく、授業で当然のこととみなされている要素も検討すべきであるという視点を獲得することとなった。

(4) 引率教員のFD(ファカルティ・ディベロップメント)としての成果

本プログラムは、参加した学生に対する教育的効果に加え、引率する大学教員のFDとしての成果も想定して企画された。大学教員のFDという視点から見ると、大きな成果を挙げることができた

それは学校教育の理念に関する成果である。大学教員は、各地域の学校教育の制度や、指導方法の知識は持っている。そのため、参加した学生とは異なり、マレーシアの教育制度やそこで採り入れられている指導方法そのものへの驚きは大きくはない。しかし、重要なのは、本プログラムがそうした教育制度や指導方法がどのような社会観、教育観のもとに行われているかを理解する機会となっていることである。マレーシアで、学校教育の制度や指導方法が、何を意図して、何を重視しているかについては、現地を訪れ、教員等と意見交換をすることによって理解が深まる。そのことは、引率する大学教員にとっても自らの教育観を相対化する優れた機会ともなる。

2) プログラムの成果からみる国際連携の課題

本プログラムは、上述のような大きな成果をもたらす有意義なプログラムである。今後、本プログラムの

ような取り組みを展開するうえでの課題を挙げておきたい。

本プログラムは、訪問先との調整が必要となる活動以外は、原則として参加する学生が、自ら計画を立てて、現地で行動することとしている。それは、「お客さん」として学生を育てているのではなく、学修する主体として学生を位置づけている取り組みだからである。

ただ、こうした理念に基づくプログラムは、事前にはその意義が分かりにくい。一般的な「国際交流」のプログラムのように、「ここに連れていく」、「こういう体験ができる」と明確に伝えることが難しいため、明確な問題意識を持っている学生でなければ、なかなか参加しようと行動を起こすことは少ないだろう。

主体的な学修機会として国際連携の取り組みに参加する重要性と意義を、学生に周知するために国際連携のプログラムと大学における講義との連携を図っていくことが今後の課題といえよう。

また、このような取り組みは、教員養成のみならず、現職教員に対しても有効であると思われる。そこで、例えば附属学校の教員にこのような機会に同行して頂くなどの活用方法も考えられる。

「NASA・学校教育・教員養成教育研究プログラム」

教育学部健康・スポーツ教育講座 准教授 原 丈貴
教育学部初等教育開発講座 准教授 深見 俊崇
教育学部初等教育開発講座 准教授 百合田 真樹人

1 プログラムの概要

(1) 学校訪問と特別授業

Texas 州 Freeport 市の幼小中一貫校の幼稚園部および小学部の学校訪問を行った。授業や子どもの様子を見学するだけでなく、学校の教育方針、それを実現するための教員間の情報共有の図り方、特に配慮が必要な児童への対処方法など、アメリカの小学校の運営についても多くの情報を得られる機会であった。また、現地の小学校 2 年生を対象に日本文化を紹介する特別授業を実施する場を特別に提供してもらい、特別授業では、日本の子どもたちに馴染みのある「折り紙」を紹介し、実際に現地の子どもたちと一緒に「手裏剣」をつくる授業を学生主体で行った。当日は新聞記者も取材に訪れ、日本人学生の授業の様子が現地の新聞にも掲載された。特別授業の後には学校内の食堂で、小学生と同じ昼食を食べることができ、アメリカの小学生の日常的な食を体験する良い機会となった。また、様々な事情で子どもとの時間をとることが難しい家庭の保護者が、子どもと一緒に昼食をとる場を学校につくり、家庭と子どもとのつながりを育む仕組みが実際に機能している場面も見ることができた。



特別授業：日本文化「折り紙」の紹介

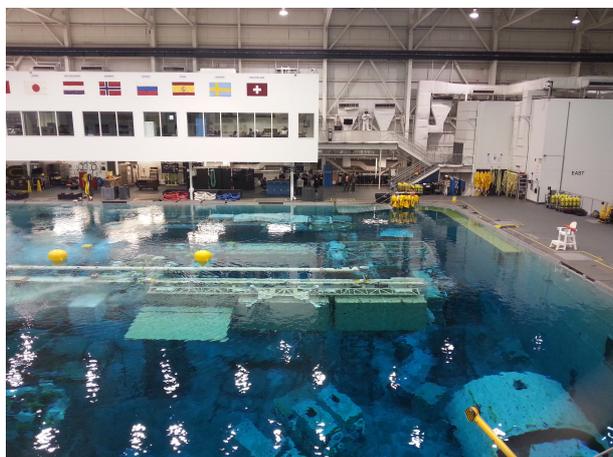


小学校の授業見学の様子

(2) NASA・SEEC プログラムへの参加

本研修の中心的プログラムが、アメリカ航空宇宙局（NASA）が主催する宇宙を教育に活用する教育実践研究プログラム（Space Exploration Educators Conference: SEEC）への参加である。世界各国から宇宙教育に関心のある教育関係者や研究者が集まり、3日間の研修プログラムが開催された。日本の宇宙航空研究開発機構（JAXA）の関係者や JAXA の選考を通過した幼稚園および小学校教員も発表者として参加していた。

施設見学では、国際宇宙ステーションの運用の中心的役目を果たすミッションコントロールセンター、宇宙飛行士が無重力環境での訓練を実施する巨大なプール施設、宇宙探索用のロボット研究施設、国際宇宙ステーションの原寸大モデルを用いた訓練施設、現役を引退したスペースシャトル運搬用の航空機内部（一般公開に先駆けて SEEC 参加者対象に紹介された）などが公開され、担当者の説明があった。



船外活動の訓練施設



ミッションコントロールセンター



国際宇宙ステーションの 1/1 モデル



サターンロケットの前で

また、宇宙をテーマとした教育の実践内容を紹介するセッションも多数開かれており、科学、工学、数学、歴史、保健体育、健康教育、美術など多分野にわたって宇宙を教材とした教育実践の事例が紹介されていた。

(3) 大学訪問

サンフランシスコ州立大学（SFSU）を訪問し、キャンパス内の施設見学を行った。その後、学生は3つに分かれて数学、社会、科学の講義をそれぞれ聴講した。当初は講義を聴講するだけの予定であったが、担当教員の配慮から実際にグループ活動の中に入り、現地の大学生と同じ立場で授業を受けたクラスもみられた。授業後は、日本とアメリカの授業の違いについて大学教員との意見交換の機会も設けられた。



SFSU のキャンパス風景



数学の授業の様子

2-①. プログラムの成果 ～教員FDとしての観点から～

SEEC への参加、小学校訪問で説明を受けた学校運営に関する様々な取り組み、大学の講義の聴講など、直接触れる情報は本来私が専門とする分野（運動生理学）とはあまり関係の無いものであるとも取れる。しかし、大学教員の立場からすれば、今回の研修は自身のこれまでの教員として、あるいは研究者としての取り組みを、新たな視点から振り返ることのできる貴重な経験であった。

宇宙開発への取り組みは、一般的には技術開発の側面ばかりが注目されがちであるが、人類が宇宙開発を進めていくためには様々な分野と多くの人たちとの連携があって初めて実現可能となるものである。SEEC では探索ロボット開発、ロケット開発、訓練施設など宇宙工学系の施設を多く見て回る事ができたが、NASA という大きな組織が宇宙開発という目標

に向かって様々な分野と連携してプロジェクトを進めている中で、教育者が宇宙教育を通して未来の大人に宇宙への関心を持たせることも、将来の宇宙開発の発展には重要な取り組みである。また、現地の小学校訪問では、学校や子どもが抱える問題解決のために、教職員全体や家庭を巻き込んだサポート体制についても説明を受ける機会があったが、この事例にしても NASA の宇宙開発にしても、組織の中で自分のできること、すべき事が何かを考えた行動が求められるであろうし、それをより明確にするには多方面から同じ問題を捉える力が必要となる。他分野との連携が求められる場面も多い中、本研修は自分自身の専門性について改めて考え直す機会となり、また、専門性を超えた幅広い視野の育成において、海外の現状に触れることは貴重な経験であることが再確認できた。

大学の講義の聴講は、短い時間ではあったが日本とアメリカの授業スタイルの違い、特に学生と教員とコミュニケーション（ディスカッション）に割く時間が非常に多いことが印象的であった。幼い時から自分の意見を他人に伝えることに重点を置いた教育を受けてきたことが背景にあるからこそ、活発なディスカッションが展開できるのであろう。将来、明確な答えのない問題が山積している社会に巣立っていく学生を教育する点ではアメリカも日本も同じである。日本の学生においては「考えるトレーニング」が明らかに不足している中、大学においてどのような教育が展開されるべきなのか、自分自身の日頃の授業や学生指導について再考させられる機会であった。（原）

2-②. プログラムの成果 ～教員FDとしての観点から～

本プログラムの最も大きな成果は、学生・教員にとって共通することであるが、学校文化・教員文化の違いを学べたことである。

日本の場合、幼稚園・小学校・中学校という区分となっているが、アメリカの場合、K-12のシステムであり、いわゆる幼稚園1年と小学校がセットになる形をとっている。また、12年の区切り方も多様であり、訪問した学校では日本での5・6年生にあたる児童がミドルスクールに通う形になっていた。

また、学校のデザインに関しては、それぞれの学級が教師のカラーを強く打ち出したものであり、掲示物などもそれぞれ工夫されている。いわゆる職員室にあたるものはなく、teacher lounge は、意見交換や議論の場としての位置づけである。teacher lounge の側には模造紙が貼り出され、学校運営や指導上の課題について、教員それぞれの考えや意見を共有できる装置が用意されていた。

学級の規模については、最大で25名程度と日本よりも圧倒的に少ない。さらに学習につい

でも一斉に進める場面があるものの、個別の課題に応じたスタイルをとっている。それは、多様な背景を抱える児童に対応するために方策であるが、日本の場合の画一的な指導とは一線を画するものであることが理解できた。

そのような個別性がある一方で、教師が協働で学習する機会が明確に設定されていた。訪問時の小学校・ミドルスクールいずれにおいても、学年の教師が児童の様子や成績の課題を共有し、ディスカッションする機会を設けていた。オンライン上の共有システムを活用して協働で授業計画を立てている場面も参観することができた（Googleの無料プログラムが多く活用されていた）。それを確保するために、担任が担当しない実技系科目やエクストラな活動を時間割に設定していた。日本の場合は、職員会議など全教員が参加する会議は定例で設定されているものの、そのような機会を設定することが実際に行われていることは稀である。

さらに、授業の捉え方が大きく異なることは、SEEC2015の参加を通じても理解できた。SEEC2015は、NASAの施設見学を通して宇宙開発への取り組みを紹介しつつ、参加者の学習の場として設定されたものがある一方で、ワークショップに関してはアメリカまたは他国の現場教員が企画・運営したものが中心となっている。NASAのプログラムを活用した実践や、宇宙開発に関わる科学技術を踏まえた実践、そしてSTEM（Science Technology Engineering and Mathematics）の実践など、現場教員が取り組んでいる実践やアイデアを共有・議論する場となっている。その実践もバリエーションが富んでおり、それぞれの工夫があった。つまり、教員が主体的にカリキュラム開発を行わねばならない条件が保障されており、それゆえ、様々な実践が可能であるということである。先に述べた通り、日本の授業は画一的な指導を基本としているが、それは検定教科書ベースであり、その指導方法に関する選択はできるものの、それを越えた実践は非常に困難であるためであろう。つまり、日本の教員は自律的な実践ができる余地が極めて限られており、創造的な実践をデザインすることが極めて制限されている。

また、学校が直面する課題に関しては、日本とアメリカで質の違いがあることも理解できた。例えば、幼稚園で毎日出席している児童を奨励する掲示物があった。教員からは、（訪問した学校区の地域的特性…経済的に恵まれていないために）出席率が課題であり、まずは学校に来ることを奨励し、出席率を高めることを意図したものであると説明を受けた。テキサス州では、児童の出席率が学校配分予算に影響することをうけたものである。日本においては、通学が当たり前になっている状況があり、不登校が問題となっていながらその割合も実際のところ極めて低い。また、学校教育に用いる言語についても、メキシコからの移民などの子弟が日常言語として用いているスペイン語も学べる環境を保障していた。日本の場合は、日本語者が当たり前の環境となっており、日本語で授業することが当たり前となっている。こうした問題の差異にふれることから、教育実践の前提の差異にも気づくことができた。

今回の学校訪問と SEEC2015 に参加することで、「当たり前」について見直す機会を得たことが極めて重要な機会だったと言える。アメリカの場合、直面する問題が明確かつ大きいため、それに対して主体的に向き合い、問題解決を図ろうとする学校また教員のエイジェンシーが発揮されていた。それに対して、日本においては、「当たり前」になっていることが多く、本質的な問題が見えにくい状況がある。さらに画一性に対する強力な文化的背景があり、それを乗り越えることが難しい状況さえ掴めない状況に陥っている。

将来教員を目指すものにとって、教育として何を目指すべきか、児童・生徒が身につけるべきことは何かを考えるにあたって、他国の取り組みを目の当たりにしながら批判的に考察することは極めて重要なのである。

これは大学の授業についても同様である。サンフランシスコ州立大学の授業に教員・学生共に参加したが、授業の進め方そのものが大きく異なっていた。課題に共通に取り組む場面があったが、大半の時間は大学教員と学生とのディスカッションで展開されていた。受け身で学ぶことが当たり前となっている講義・演習のスタイルが多い日本とは異なり、学生の学ぶ姿勢が全く異なっていた。日本において、次々と手が挙がり、質問と回答、新たな疑問という形で展開され続けていく講義・演習は極めて希であると言えるだろう。これもまた学びに対する自らの責任を意識しているかどうかの違いが大きいはずである。一朝一夕にそのような姿勢が身につくわけではなく、幼少期・初等教育・中等教育の積み重ねの結果であると言える。

社会に送り出していくにあたって、どのような教育を目指していかねばならないのか。それはやはり自国だけを見ていてはわからないことであり、他国を鏡としつつ、何を受容し、何を維持していくかを吟味していくことが重要なのである。(深見)

3. さらになる有意化にむけた提案や改善点

【分野に囚われない学生参加の促進】

本研修は SEEC への参加が中心となったプログラムであるが、理科教育分野を専門とする学生に留まらず、如何なる専門性を持った学生であっても多くのことを学ぶ絶好の機会である。しかし、本研修に限らず国際連携事業として実施されているプログラムに対し、例えば SEEC がメインの研修であれば理科を専門とする者、現地の学校訪問がメインの研修であれば教職志向の高い者、というようにプログラムの具体的内容によって参加対象を自ら勝手に狭く絞ってしまっているように感じている。自身の専門とする学問分野が、プログラムの具

体的内容と直接関係していないように見えても、何かしら自分を高める上で有益であることに考えが至っていない者が多いのではないだろうか。海外の文化に直接触れ、現地の人たちとコミュニケーションを取ることで学べることは何か、海外研修をプログラムの内容に囚われない見方で受け止めることができるようになるような働きかけが必要だろう。

【学習の場としての大学教育】

海外に限ったことではないが、訪問して学ぶためには、その背景を読み解く知識・理解が不可欠である。学校現場での問題を相対化するためにも、日本の学校に関する知識・理解、他国の教育に関する知識・理解が不可欠である。それゆえ、学部教育全体でいかに学びを深めるかが課題となる。

体験等に関する政策的・社会的要請があるが、そもそもの学生が学ぶ意思を育む教育プログラムとなっているのかを問い直し、高等教育としての機能を高めることが重要であると言えるだろう。

「NASA・学校教育・教員養成教育研究プログラム」

～学生レポート～

教育学部初等教育開発専攻 太田 絵理
原田 扶未子
武田 健太郎
塚田 大樹
教育学部自然環境教育専攻 須貝 裕貴

本レポートについて

10 日間にわたるアメリカ合衆国テキサス州ヒューストンでの学校訪問研修，NASA ジョンソン宇宙センターで開催された宇宙につながる教育実践研修，及びサンフランシスコ州立大学の訪問研修と，教員養成課程科目受講体験などから得た経験と，参加した自身の目的意識を合わせて紹介する。

○現地学校訪問研修

- ・ 訪問先：Brazosport Independent School District (学校区)
- ・ 訪問にさいして自身が設定した目的
 - ▷ 日米のカリキュラム相違点（子どもが主体として学ぶためのヒントを得る）
 - ▷ 教育をめぐる文化的な差異及び共通点の観察
 - ▷ 教員の姿勢と役割についての観察
 - ▷ 教員と児童・生徒との関わり方の考察

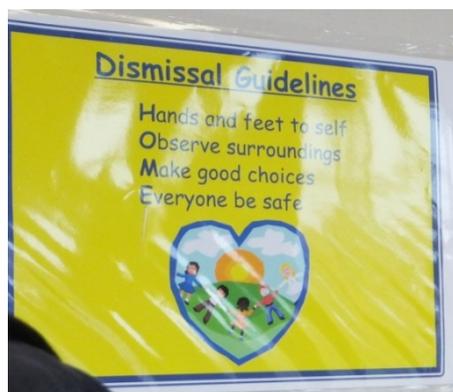
訪問した学校は経済的に困窮する家庭の多い地域にある学校で，通ってくる子どもも家庭環境が良いとは言えない場合が多いとのことだった。アメリカでは家庭の収入が一定額を下回ると子どもの昼食に対して補助金が出される制度(Federal Free Lunch Program)があり，訪問した学校は，その補助金を受けている子どもが全校生徒の 8 割を占めていた。しかし，学校の雰囲気から貧困から想起される学習環境や学習態度の乱れを感じさせるようなことはなく，経済的に困窮する家庭の児童が多いことを聞いた際には驚きを感じた。

訪問した学校区でも，貧困に限らず，地域に麻薬の問題や服役中の親をもつ児童も相

当数いると言うことで、児童の家庭環境は必ずしも良いものではないということである。しかし、学校の雰囲気や教室での児童の様子は、こうした家庭環境の問題を感じさせないものであった。こうした学習環境が維もされている背景には、個々の教員と教員組織が徹底した環境や指導方法を工夫していることを伺うことができた。

一例をあげると、学校内の各所の規律と思いやりに基づく行動を推奨する掲示や、多様な子どもに応じて変化する評価方法の他、給食の時間に保護者がいつでも立ち寄って子どもと一緒に昼食を食べることができる仕組みの活用などといった様々な工夫を見ることができた。

学校内の掲示では、学校のルールや右の写真にある Dismissal Guidelines などが掲示されていた。Dismissal Guidelines とは、人としてすべき行いを子どもに推進する掲示であった。その内容はトイレにいったら手を洗うといった内容や、ドラッグ禁止といった内容など基本的なことについて書かれているものが多かった。訪問した学校の先生は、子どもに不足している点を明らかにするとともに、



その認識を共有し、その補完に学校として何ができるのかをそれぞれに考えておられた。こうした点を明確に感じることができたのは、教室や廊下でお話した先生がそれぞれに自分の言葉で、問題の多い地域の学校における問題と、それらに対する自分の役割と存在意義をはっきりと主張しておられたことだった。教師自身が自ら考え、考えたことを同僚と共有し、行動に移す姿勢は見習うべきだと強く感じた。

また、学校全体が加点的評価を用いていることを強く感じた。面白いところでは、廊下におかれた写真に示したようなボックスがある。このボックスは、子どもが主体的に良い行いをするようにすること、そうした良い行いを教師が積極的に評価することを意図した取り組みである。



良い行いをした子どもは、先生から自分の名前を書いてもらったピンクのカードをもらいそれをこのボックスに入れる。それぞれのボックスには、5つの権利が書かれてあり、良い行いをした子どもは自分が希望する権利を得られるという仕組みである。権利には宿題を一回やらなくても良い権利から、回る椅子に座ることのできる権利などの小さな楽しみのもので様々用意されているが、予算を必要としないこと、子どもにとって特別なものであることが工夫されているということだった。

最も多くのカードが入っている（最も人気のある）権利は、右端にあるキャンディーバーをもらえる権利であったが、これもこの学校区のある地域が経済的に恵まれない家庭の子供が多いことを示しているとのことだった。つまり、この学校に通う多くの子どもは、家庭の金銭的な理由からお菓子を買ってもらえることが、特に嬉しいことということだった。一つ一つのキャンディーは1ドル（120円）もしないことを考えると、経済格差の深刻さを感じるとともに、こうした点を注意深く観察することで、子どもや子どもが学ぶ地域の環境をうかがい知ることができる。

また、こうした格差を感じさせない教育環境を用意する学校側の工夫にも感心した。カードを渡すタイミングは各教師に委ねられていることから、評価のタイミングや基準に偏りが出にくいいため子ども自身が評価されるために行動をするのではなく、何が良い行いかを自ら考える力を養うことにもつながると考えられる。

給食では、保護者と子どもが共に食べる空間が設けられており、二者がコミュニケーションを取る場として機能していた。日本では、親子間のための空間を校内につくるということや、保護者が日常的に学校へ訪問するという習慣はあまりないが、訪問した学校では、1日に保護者が20人程度来るとのことであった。家庭環境があまり良くないことを再認識させられるとともに、学校教育・家庭教育とを分けて考えるのではなく、一人の子どもを共に育てているという認識が学校教育と家庭教育の間で共有されているのだと感じた。

もちろん教科指導にも力が入れられており、毎日同じ学年を担当している教師が集まり、勤務時間内に毎日数学・国語・社会・理科に関する子どもの理解度や授業の改善について話し合う会議を行っていた。日本では、教員による会議は勤務時間外に行われ、頻度も訪問した学校に比べればはるかに少ない。子どもの学びについて教師が授業に支障をきたさない時間帯で真剣に指導について意見を交わすようなシステムは、教師にとって働きやすい環境であると同時に、子どもの学習へのサポートもしやすくなるという点で子どもにとっても良い環境を生み出すと考えられる。

訪問した学校では、教師自身が児童・生徒への教育実践と学校教育を通して地域社会の向上を目的として行動する **Agency** であるとともに、学校での教育活動とその環境を日々改善することに参画している姿が見られた。こうした姿は、学校訪問研修を通して出会った全ての先生が、学校のシステムや考え方、さらにはそれぞれが教育実践の向上と改善に向けて取り組んでいることを具体的に明確に説明できるということから感じることができた。それだけ学校の方針を共有した上で自分のやるべきことを考え実行しているということだろう。学校で行われていることはすべてが改善の対象であり、改善は常に行われており評価に関する表や教員全員が意見を記入できる掲示があったことから、学校で行われていることはすべてが改善の対象であるということ、そしてその改善は常に行われているということが分かった。項目ごとに教員が意見を書き加え、それに対して管理職がコメントしたり改善に取り組んだり学校をより良くすることを共

通の目的に日々の実践がなされていた。

また、今回は子どもたちに日本の文化を紹介する活動を行う機会をいただき今回は折り紙を使って手裏剣を作ることに挑戦した。日本の子どもたちは幼いころから折り紙や公告紙などを使って遊ぶことが多く、紙を二つに折ったり、端と端を重ね合わせたりすることを多く経験していて、比較的紙の操作には慣れている。しかし、アメリカの子どもたちはそのような文化がなく経験が圧倒的に少ないため紙を折るという行為に悪戦苦闘していた。その一方で、子どもたちの追究力はとても強く、言葉の壁のある私たちに対するコミュニケーションに関してとても積極的であった。折り紙が上手く折れないとすぐに私たちを呼び、助けを求めてきた。日本では言葉の壁を感じると相手を避けたり、身構えたりしてしまいがちであるが、他の文化圏の人と関わる機会の多いアメリカでは、自分と異なる文化の人々と対等に関わる習慣があるのだと身をもって感じる事ができた。

今回、アメリカの幼稚園・小学校を訪問し最も強く感じたのは、教員や保護者が「すべては子どものために」という目的を共有しようと努力しており、その目的のもとに行動しようとする意志のようなものである。「家庭と学校で子どもをより良く育てるのだ」という意思是学校で行われる取り組みのすべてを改善の対象とし、貧困等の環境とは無関係の良い学ぶ雰囲気を作り上げているのだと実感した。

○NASA・SEEC への参加

- ・ 訪問先：Space Center Houston
- ・ 訪問に際して自身が設定した目的
 - ▷ 宇宙を教育に活用した指導法と教材の見学
 - ▷ センターの職員、各地から集まった教員の取り組む姿勢の観察
 - ▷ 宇宙開発が行われる環境の観察
 - ▷ 海外の理科教員と日本の理科教員の違いの観察

宇宙を教育に利用するためのワークショップである SEEC では、宇宙を教育に活用する指導方法や教材について学ぶとともに、各国の方との関わりから文化の違いについても触れることを目的に活動した。

SEEC で 1 番驚いたことは、ジェンダー格差の存在を感じなかったことだった。日本では上の役職に立つ人は男性の方が多いが、アメリカでは男女関係なく、むしろ女性の方が多く感じました。特に NASA で研究されている宇宙の分野は主に理系ということもあり、日本において理系は男性の割合が圧倒的に多い。理系の分野で活躍する女性のことを「リケジョ」と呼ぶくらいである。しかし、SEEC ではそうした隔たりはなく、男女共に活躍する場であるように感じた。キーノートで登壇された NASA の次期

主力プロジェクトのリーダーも女性であった。

SEEC の期間中毎朝行われるプレゼンテーションでは、話し手はそれぞれ自分のもち味をしっかりと生かしたプレゼンテーションを行い、聞き手は反応を表に出すというように、一方的なプレゼンテーションではなく、話し手と聞き手が相互に関わってつくられていた。質疑応答の際にも積極的に質問がされており、全体がこの時間を有意義なものにしたいという雰囲気を感じた。日本は、恥の文化とも言われているが、質問だけでなく聞いている反応もあまり表には出さないと改めて感じた。初日に行われた宇宙飛行士によるプレゼンテーションでは、自身が宇宙飛行士になった経緯をユーモアたっぷりに語っていた。それは日本の報道でよく目にする“宇宙飛行士”という仕事を実直に果たす宇宙飛行士とは全く異なり、「宇宙飛行士は人生の一部でしかなく、様々な役割のうちの1つである」といったスタンスで自分の人生を語る彼の姿はとても印象的だった。

ワークショップでは、宇宙を活用した教育実践の方法や NASA の施設についても見ることができた。Johnson Space Center では、宇宙での任務を管理するミッションコントロールセンターや実際に宇宙飛行士が訓練する巨大プールなどの様々な施設を見ることができた。ロケットの歴史や宇宙開発について知ることができたとともに、私たちの生活との関わりなど、自身がこれまで無意識であった宇宙とのつながりを感じることができた。

各セッションでは、発表者が指導法や教材などについて、学習者が興味をもち取り組めるように、あらゆる工夫を凝らしていた。例えば、放射線に関するセッションでは、学習者にとって身近である懐中電灯を使い、放射線の性質について目で見て分かるような工夫がされていた。また、雨量などの気候に関するセッションでは、ブロックを用いて雨量を示したグラフを表現する活動を行い、実際に手で作業することで理解を深めることができるように工夫されていた。全体に共通して、子どもが目で見たり、手で作業したりと興味をもつとともに実感を伴った学習ができるように工夫されていた。また、**Living and working on the ISS (International Space Station)** というセッションでは、問題解決のためには知識同士をつなぐ必要があるというプレゼンテーションが行われた。参加者には、パズルのピースが提示され、それらのピースには、「歴史」、「読解力」、「物理学」などが書かれていた。発表者は中核に「歴史」を置き、それを中心に「読解力」や「物理学」などの知識をつなげる必要があると説明した。そして、「**what kind of would do you want?**」という問いを私達になげかけ、その問いに答えるためには、つなげた知識を使って答えていく必要があるのだと発表した。日本では、学校教育において科目ごとに指導され、テスト等の問われ方も科目ごとに問われる。それらの科目で学んだ知識を統合することは求められず、知識をつなげるという発想はあまりないように思われる。問題解決を目的とした場合、問題に対して様々な角度からのアプローチが必要となるため知識がつながっている方が効果的だろう。この点で、単一の科目の集合体として存在している日本の学校教育に疑問を感じた。

SEEC では、宇宙という未知な舞台に踏み込んでいった人たちの軌跡やこれからの展望などを見ることが出来た。SEEC が開催されるにあたって、様々な国から教師が集まり、宇宙の分野について考える機会が設けられていた。そこで、「なぜ教師が宇宙の分野について考える必要があるのか」と思っていたが、教育が宇宙という分野に力を注ぐということは、未来の科学発展のためであり、社会・世界をより良いものへと構築していくことにもつながるのだと感じることができた。宇宙は未知数なものが多く、まだわかっていないことが多数ある。そこへ興味をもち、教育を進めていくということは、未知への挑戦であり、子どもたちの可能性を捉えることにつながると感じた。教師自身が、教育がそうした役割を担っているという認識をもつことで、次世代の社会を担う子どもたちへの教育に対する意識も異なっていくだろう。「なぜ～なのだろう？」と子ども達が自ら探究していく姿勢を育むためには、探究活動を子ども達自身が経験することが必要であると感じた。

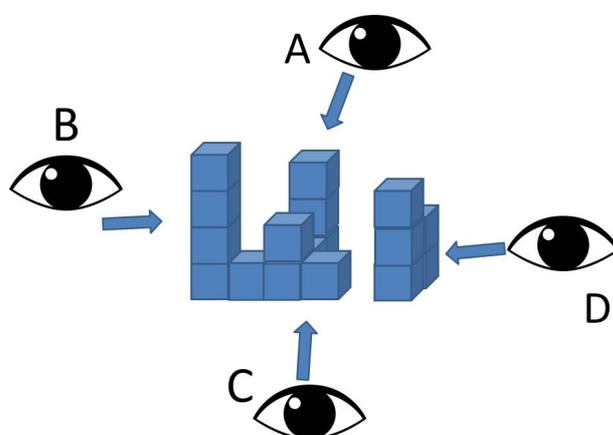
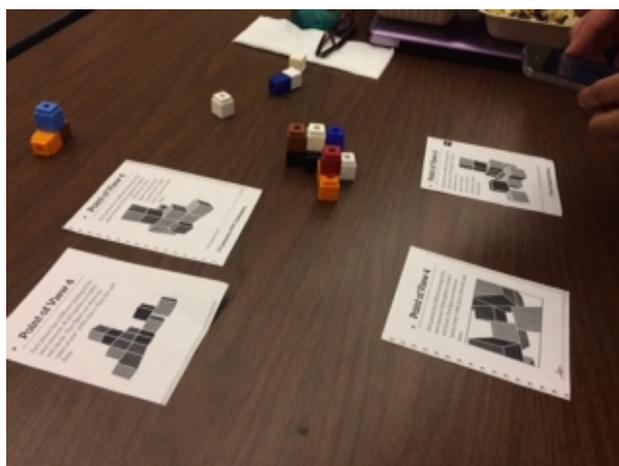
○サンフランシスコ州立大学訪問

- ・ 訪問先：サンフランシスコ州立大学
- ・ 訪問に際して自身が設定した目的
 - ▷ 学生の学びに対する姿勢の比較
 - ▷ 教授と学生の関係の観察
 - ▷ 大学の施設、環境の違いの観察
 - ▷ 講義の雰囲気観察

サンフランシスコ州立大学では、大学内を散策後、実際に算数・社会・理科の講義に分かれて参加することができた。

学内の散策では、図書館は本のスペースというよりも、学生が有意義に学ぶことができる場所を確保しているようにも感じた。体育館では、バスケットボール部が練習をしており、体育館にも大学のブランドのようなものを感じさせるデザインが施してあった。こうしたデザインは学生の服装にも見えた。構内を歩いている学生の中に「SFSU (San Francisco State University)」と書かれたパーカーや T シャツを着た学生が多くいた。その姿から学生が大学に誇りをもっているということを感じた。日本にいても「〇〇大卒」ということがブランド化していることがあるが、それは大半が都市部の有名私立大学であり、公立大学がブランド化されることは、一部上位校を除いてあまり見られない。しかし、サンフランシスコ州立大学では、学生が自身の学んでいることに誇りをもち、その機会を与えてくれる大学に誇りをもっているように見えた。こうした誇りは学生が自身でこの大学を選択し、学ぶことを選択した自信から来ているのではないかと感じた。

算数の講義は、グループワークについての内容であった。今回、グループ活動が主な学習スタイルで、ブロックを使った授業実践の体験や、実際の授業の動画を見て議論を行った。教える内容についての講義ではなく、グループワークで子どもが学習に積極的に参加できる環境という視点を重視しているように思われた。ブロックを使った実践では、右の図のような、一つのブロックの形を異なる角度から見た時の図が書かれた紙が一人一人に配られた。そして、自分のもっている紙をグループのメンバーには見せずに、グループ内で協力して元の形をつくるという活動をした。この活動は物の見方を養うだけではなく、自分の意見を相手に伝えるという基本的なことや、協力して一つのものを完成させるという力が養われることを期待する



る活動であるように思われた。また、授業の動画を見て議論を行う活動では、実際の学校現場の授業の様子も見る事ができた。今回見た動画では、二次関数についての授業実践で、まだ教えてもらっていない内容をこれまで習ったことを使ってグループで解いていくといった授業実践であった。これまで、日本との違いに着目してきたが、今回の動画では日本との共通点を見る事ができたように感じた。この動画で行われているようなグループワークの実践は日本でも行われている。しかし、同じような取り組みであっても、その取り組み方には違いがあったように思えた。それは、子どもが他の子どもに「君はどう思う？」といったように、グループワークだからこそできる意見交換を進んで行っているところから感じた。つまり、同じグループワークでも、なぜグループワークをするのか、グループワークではどんなことができるのかなどを子ども自身が理解した上で行っているように感じた。グループワークに限らず、取り組みを行う上で、なぜこの取り組みをするのか、この取り組みは何を得ることができるのかなどを子ども自身が理解することが必要なのではないかと感じる事ができた。

社会科の講義は、学生が一人ずつ教育実習での成果や反省を発表し、それについて他の学生と議論をしていくというものであった。この講義では、主に二点の教育実習にお

ける日本の学生との違いを感じた。

一点目は、教育実習における日本の学生との視点の違いである。各発表者は、自分の教育実習先の子ども達の特徴を細かく説明した後、特に自分が直面した課題について述べていた。ある学生は、子ども達に対する社会的公正を意識した呼び方について省察していた。「guys」という呼び方には、男性を示す要素が含まれる。クラスの子ども全員に呼びかける時に、こうした普段使っているような言葉が無意識の内に出てしまうという内容であった。また、特別支援についての判断が公正なものではなく、人種的に判断されたものなのではないかという発表もあった。この発表を行った学生のクラスには7人の特別支援を必要とする児童がいたが、その全員が黒人であった。この学生は、その児童たちが「黒人」というマイノリティが故の何らかの要因によって「特別支援が必要」と判断されているのではないかという可能性の存在を遠回しに訴えていた。このように、こちらの学生は、授業の出来や人間関係などに目を向けていた私たちには無い、学校におけるジェンダーや、人種、文化などに関する視点があり、それらについてとてもセンシティブに考えているということが分かった。

二点目は、発表の中で教育実習先の指導教員に対して批判的な意見があったことである。教育実習の反省という点、私たちは授業の出来や自分と子どもとの関わりなど、自分に対する反省に留まり、指導教員の批判などを講義で行う発表の場では口に出さないように思われる。ここから考えたことは、彼らは物事のすべてを改善の対象として見ているということである。学校における教育活動や教員の指導について、「指導教員の方がプロだから正しいのだ」というような考えではなく、その場その場で行われる物事が本当に正しいのかということを常に考察している姿勢が見られた。このような姿勢は、私たちに欠けていた点であると考えられる。

理科の講義は、生徒の評価方法についての講義であった。授業のスタイルは、前を向いて座らず、丸いテーブルを囲むように座り、いつでもディスカッションが行えるような体系をとっていた。さらに、教授は一か所に留まらず、絶えず全体を見るように動き、教室を全面的に使用していた。これにより、学生は常に教授へと意識を傾けることとなっていた。また、学生は講義の途中でも疑問に思ったことや、意見があった場合にはすぐに挙手をし、教授と学生、学生と学生とでディスカッションが行われていた。教室内のスタイルや、幼い頃からの学習習慣の違いがよく分かった。また、一コマの時間が三時間と長丁場であった。これは、先ほど述べたディスカッションの時間をできるだけ長くとることができるようにするためだと考える。教授の問いかけは、常に理由を問うものであった。しかし、それをよしとする時間の融通を感じた。そして、学生のディスカッションを受けて、講義のねらいに到達していない内容を教授するというスタイルであり、上から学習内容が降ってくるような環境ではないことが分かった。また、講義を見ていると、板書の時間は皆無であった。日本だと板書の内容がテストに出て解答すると

いうものや、大学でも講義を受けた上でどれだけの知識を獲得したかという評価になりがちであるが、アメリカでは、講義の中でのディスカッションの内容、レポートの内容で採点しており、この評価方法も学生が受け身とならず、主体的に講義に臨む理由の一つではないかと感じた。

各講義については上記の通りであるが、講義全体を通して大きく二点の日本との違いを見ることができた。

一点目は、各講義のシラバスの違いについてである。見学した講義のシラバスには、科目の目的・各課題の内容と評価観点やその課題の意義についてまで細かく書かれていた。授業の学びの質が保証されているという点で講義の品質保証書のような役割を果たしており、普段我々が受けている講義のシラバスよりも詳細なもので受講生側のモチベーションも高まる内容であった。

二点目は、授業の雰囲気についてである。授業を見学したクラスでは、学生がリラックスして授業に臨めるようにコーヒーやお茶を教授が準備していて、授業もコーヒーを飲みながら進み、とても自由な雰囲気だった。教授が学生を信頼しておられるようで、他の人をディスリスペクトするような行為以外は何をしても良いというようだった。そのため、授業の雰囲気は日本の小学校低学年の教室の雰囲気に似ていて、学生の発言数がとても多く学生の疑問を基に議論が展開されそこに教授も加わるという状況が何度も生まれていた。教授からの一方的な知識の提供ではなく、実際の事例を基に議論を通じて学びを生み出していくスタイルはとても新鮮に感じられたし、この授業の雰囲気や学生の授業への参加の仕方は私たちが大いに参考にすべきだと感じた。

○現地研修

- ・ 訪問先：サンフランシスコ市内
- ・ 訪問にさいして自身が設定した目的
 - ▷ サンフランシスコの人々の暮らしの観察
 - ▷ 経済レベルの格差についての観察
 - ▷ 店や会社において人がどのように働いているかの観察

今回の研修では、自由に活動する日が設けられていた。サンフランシスコの街では、富裕層と貧困層の格差を間近で見ることができた。高級車外車で移動する者もいれば、ゴミ箱をあさって回り、道路で生活するホームレスの人々も多く見られた。日本でも見られる光景ではあるが、様々な格差があり、経済格差や教育格差についても考えさせられる光景であった。

英語での会話はとても良い経験になった。拙い英語でありながら、アメリカの人たち

は私たちに分かるまで丁寧にゆっくり説明し、私たちの話を一生懸命理解しようと聞く姿がとても印象的であった。言葉が違っていても、文化が違っていても、人としての関わりは同じであることを目の当たりにしたように感じた。

また、「Thank you」という言葉はアメリカにいる間何度も聞き、何度も言った。日本で「ありがとう」という感謝を伝えることがまだまだ少なかったと痛感した。小さなことも大きなことも感謝を伝えることでその人のモチベーションにもなり、また、自分と相手とのコミュニケーションともなると感じた。英語を話していて、気付いたことがもうひとつあった。英語を話していると、日本で言う敬語をそこまで意識することがなかった。どうしても、日本での会話の中で敬語が使われると、相手との間に「差」や「関係性」などを感じてしまう。それが英語を話す文化では、そういった意識をすることがなかった。こういった、このような敬語を意識しない文化は、議論や大勢でひとつのことを決めるときに有意義な話し合いを作り出すことに役立っているのではないかと感じた。普段、日本にいて一つの言語しか使っていない私たちにとってはとても重要な体験だった。

「韓国パジュ英語村研修プログラム」

教育学部言語文化教育講座 准教授 大谷 みどり

1 プログラムの概要

プログラムのねらい

アジアの英語教育先進国といわれる韓国を訪ね、韓国最大の英語村での英語研修や現地の学校訪問を通し、英語教育を含め多様な教育の在り方を学ぶ。また、韓国の学生との協働学習・共同生活を通して、異文化理解・英語運用能力の向上を目指す。

日程

2014年 11月17日(日)～24日(日)

日付	概要
11月23日(日)	米子空港→韓国仁川空港 ----- 韓国仁川空港→Paju 英語村
11月24日(月) ～28日(金)	Paju 英語村において、韓国の学生との協働学習
11月27日(木)	現地校見学
11月29日(土)	韓国文化実地研修(ソウル市内)
11月30日(日)	Paju 英語村→韓国仁川空港 ----- 韓国仁川空港→米子空港

内容

Paju 英語村において韓国の大学生との協働学習、現地の学校訪問、韓国文化実地研修等

参加者

教員：縄田 裕幸(教育学部言語文化教育講座教授)

大谷 みどり(教育学部言語文化教育講座准教授)

学生：2年生3名(教育学部)、4年生1名(法文学部)、現職コース院生1名、他大学学部生1名

2 プログラムの内容

韓国 Paju 英語村

アジアの英語教育先進国である韓国では、地方自治体もしくは民間による英語村が数多く建設されており、その数は現在およそ 40 と言われている。今回訪れたのは、英語村としては韓国最大の規模、かつ自治体が運営している「Paju 英語村」で、ソウル近郊に位置し仁川空港からバスで 30 分ほどの距離にある。韓国第 2 の自治区・キョンギ道によって設立され、体験的に英語が学べるアジア最大の「英語のテーマパーク」と呼ばれている。敷地面積は約 8 万 4000 坪、東京ドーム 6 個分という高大なものである。敷地内には、一般的な授業を受ける教育棟をはじめ、様々な体験を通して英語を学ぶ体験教育棟が多数並び、英語を使いながらドラマの制作、科学の実験、調理、スポーツ等が学ぶことが出来るようになっている。さらに宿泊研修用に 750 名まで収容できる数多くの宿泊棟、600 席を持つコンサートホールやレストラン・パブなども含まれている。



1) Paju 英語村における韓国の大学生との協働学習

英語研修は 5 日間 9～18 時まで行われ、島根大学からの参加者とほぼ同数の、韓国の国立大学の大学生と共に受講した。研修の講師は、TESOL の資格を持った英語村専任の教員で、一週間の研修内容は以下のとおりである。一日目のレベルテストで、国・性別等も考慮して二クラスに分けられ、一クラス約 5 名の少人数での授業と、合同の授業が実施された。

11/23	11/24(月)	11/25(火)	11/26(水)	11/27(木)	11/28(金)	11/29(土)	11/30(日)
	オリエンテーション	施設見学 (英語村)	ホーム ルーム	韓国の 学校見学	プレゼン準備	韓国文化 実地研修 (ソウル 市内)	英語村発 ↓
	アイス ブレーキング	異文化 理解	説得術		グループプレゼン テーション		仁川空港
	昼 食						ソウル発
	英語運用能力 テスト	英語慣用句 繁用動詞 表現	メディア教材1 メディア教材1	スラング アドバイス コラム	クロージング		↓
米子発 ↓	英語教授法1 (動機づけ)	英語教授法2 (学習スタイル)	英語教授法3 (質問方法)	模擬授業			米子着
ソウル 着 ↓	交渉術	メディア教材1	ディベート				
Paju 英 語村着	プレゼン方法	復習と ふり返り	復習と ふり返り	復習と ふり返り			



授業は英語運用能力の向上だけではなく、教師を目指す学生が対象であるため、英語教授法や英語の授業で応用できる活動が多く取り入れられていた。参加した学生は、英語だけでの授業だけでなく、韓国の学生の英語力の高さと積極性からも、多くの事を学んだと思われる。

また、授業を受けるだけでなく、授業後も宿泊棟で韓国の学生と二人部屋で過ごすため、参加学生は滞在中、ほぼ英語を使うことを強いられ、これは参加者にとっては非常によい経験となった。

研修1日目は、お互い遠慮がちであったが、2日目からは一緒に食事を取ったり教えあったりする場面が急激に増え、4日目の最終日前日には宿泊棟で打ち上げを行った。また研修最終日には、参加者全員でLineを作成し、現在もやりとりを継続している。

2) 現地校見学

研修4日目には、韓国の公立小学校を見学した。韓国では2007年より初等教育教員養成課程で英語が教科として位置づけられ、小学校教員養成課程においても、教科としての英語が必修であり、小学校教員の英語運用能力も高い。見学したのは3年生の英語の授業であったが、子どもたちは非常に積極的に英語を話し授業に参加していた。また日本と異なり、英語が始まる3年生から文字が導入されているため、3年生の授業でも、子どもたちが英語の4線のノートに英文を書き、また黒板に書かれた英語の文章を読むことが出来ている様子であった。英語の教材室や図書スペースもあり、教材もかなり豊富である印象を受けた。

授業観察をした学生は、子どもたちの授業への積極的な取り組みや英語を話す事への積極性、そして小学校教員の英語力の高さに感心していた。学生達は、英語村での研修を通して、韓国の大学生の英語のレベルの高さを実感していたが、韓国の小学校を見学することで、積極的な英語教育の取り組みを、また別の角度から学ぶことが出来た。学校見学後、参加した学生から「学ぶことが非常に多かった」という感想が寄せられた。



3 プログラムの成果と課題

1) プログラムの成果

① 日韓学生交流の意義

本プログラムの成果として、まず日韓学生交流の意義をあげたい。竹島や慰安婦の問題等、政治的には複雑である両国の大学生が、本研修中は机を並べて学び、また寝食を共にすることで非常に親しくなり、研修後もSNS等を通して交流が続いている。昨年度、本研修に参加した学生も韓国の学生との交流が続いている。外交面では複雑な両国の間で、これからの担う大学

生が、英語を共通語として楽しく語らうことができるというのは、両国の将来にとって、大切にすべき機会であると思われる。

② 近隣諸国における英語教育からの、学びと刺激

今回のプログラムでは、韓国の積極的な英語教育への取り組みに関して、3つの視点からの学びがあった。一点目は、「英語村」という学びの場である。そこに足を一步踏み入れると、英語を使わざるを得ない環境が作り出されており、かつ、強制的にはではなく、楽しく、また体験的に学べるという点が、これから教員を目指す学生には、非常に大きな学びとなった。

二点目は、韓国の小学校で英語の授業を見学することにより、韓国の初等教育における英語の取り組みを直接体験することが出来、さらに授業の様子だけではなく、授業が行われた英語ルーム、教材や英語図書のスペース等、教材や施設の在り方からも多くを学ぶことが出来た。日本の初等教育においても英語教育の在り方が大きく変わろうとしており、また韓国の英語教育が参考にされていることから、今回のプログラムは、参加学生にとっての学びは大きいと思われる。

3点目は、韓国の大学生との協働授業・共同生活からの学びである。参加学生は協働授業を通して、韓国の大学生の英語のレベルの高さ・授業への積極性を痛感していた。ショックを受けた学生もいたが、自分たちと同じく英語を母語としない韓国で、どのように英語が学習されているかを知りたい、自分たちももっと積極的に英語に取り組みたい、と今後に向けて、貴重な刺激を受け、新たな目標が生まれたと思われる。

③ 共通語として、コミュニケーションツールとしての英語の重要性

韓国の学生の英語のレベルの高さを実感しながらも、協働授業・共同生活を通して、共通言語としての英語でのコミュニケーションの重要性、そして英語で伝わることの楽しさを実感出来た、とほぼ全員の参加者が感想を述べている。これまで、勉強の対象であった英語から、コミュニケーションツールとしての英語への、大きな意識転換が出来たように思われる。研修中も、また研修後も、「これからは、もっと英語学習に積極的に取り組み、もっと話せるようになりたい」と述べる参加学生が殆どであった。

まとめ

本プログラムは、初回の昨年度に続き、2回目の研修であったが、参加した学生は非常に多くの事を学んだと思われる。韓国の学校見学や英語の研修からだけではなく、韓国の大学生と共に学び、過ごすことで、国際交流や異文化理解の大切さと共に、互いに英語を外国語とする者同士、共通語としての英語でコミュニケーションをする事を通して、英語を学ぶ大切さ・楽しさを実感出来たと思われる。また帰国後も韓国の学生とのやりとりが続くことで、英語学習への意欲も持続されると思われる。米子から片道1時間半で海外体験ができることも魅力の一つであり、学生からも、英語力を高めて、また英語村で韓国の大学生と一緒に学び・過ごしたいという声が多く聞かれた。

上述の通り、近隣諸国の教育の在り方、またその教育を受けて育った学生と交流をすることで、非常に多くの事を学ぶことが出来た。教授法の違いといったレベルから、学ぶ目的や動機づけなど、参加した学生には、非常に参考になる部分が多かったと思われる。これからの社会を担う両国の大学生が草の根レベルで親しく語り合えることが出来る貴重な機会であり、またグローバルな人材を育てるという視点からは、コミュニケーションを通して相互理解を深める大切さ・楽しさ、コミュニケーションのツールとしての英語の大切さを、短期間でも体験できる貴重な機会であると思われる。

「ミシガン州立大学・島根大学協働学修事業」

—双方向プログラム：「受けいれ」と「送りだし」—

教育学部初等教育開発講座

准教授 香川奈緒美

プログラムの概要

本プロジェクトは、米国ミシガン州立大学と本学の学生が、教育・協働学修をとおして国際理解を育むこと、又、教育観の相対化を行うことを目的としている。特に、本学の学生は、日本とは異なる米国の教育観、教育方法、教育システム、教師像、学生像を観察・探究し、グローバルな視点の獲得を目指す。

本プログラムの特徴は、以下の3つである。

- 1) 2大学間で、双方向の学生派遣が行われ、協働学修を日米両文化環境の中で行うこと
- 2) 学生のみならず、教員・研究者、事務職員の相互派遣・研修を行うこと
- 3) 両大学の講義の融合（派遣先で、受入れ大学の学生も含めて講義を行う）

以下、「受けいれ」と「送りだし」事業それぞれについて、プログラムの概要、内容、成果と課題を示す。

1. 「受入れ」プログラムの概要

1) プログラムのねらい

本学にミシガン州立大学の教員と学生を受入れ、本学で協働学修を行う「受入れ」事業は、より多くの日本人学生に海外留学と類似した環境を与え、英語能力向上の動機付けを目指すのみならず、異文化を持つ他者からの視点に触れることで自分の価値観を相対化し、グローバル教員に不可欠な感性を磨くことを目的としている。

2) 日程

2014年5月14日（水）～5月28日（水）

日付	概要
2014年1・2月	島根大学生向け事前講義：異文化間コミュニケーション

	学
5月14日(水)	テキサス大学生, 松江到着 学長表敬訪問, 学長主催歓迎会
5月15日(木)	島根大学オリエンテーション・学内案内 合同講義: 留学の目的
5月16日(金) ～5月18日(日)	三瓶宿泊研修 合同講義: 教師の役割 文化交流活動
5月19日(月)	松江養護学校・松江市立女子高校訪問
5月20日(火)	合同講義: 日米学校比較
5月21日(水)	朝酌小学校研修
5月21日(水) ～5月22日(木)	多古鼻宿泊研修・職員研修 合同講義: グローバル教育
5月22日(木)	成果発表・報告会
5月23日(金)	大社高等学校見学・合同講義: 図書館の在り方について
5月23日(金) ～5月25日(日)	ホームスイテプログラム
5月26日(月)	教育学部主催 送別会
5月27日(火)	ミシガン州立大学生, 松江出発
5月27日(火) ～5月28日(水)	広島研修 合同講義: 平和教育

3) 主な研修内容

- ミシガン州立大学 David Wong 准教授と島根大学 Naomi Kagawa 准教授による合同講義
- 現地幼稚園・小学校・高等学校見学
- 文化施設見学

4) 参加者

ミシガン州立大学教員: Dr. David Wong (教育心理学・グローバル教育)

ミシガン州立大学院生・引率補助: Mr. Alan Wu

ミシガン州立大学生: グローバル教育専攻 7名

島根大学教員: 香川奈緒美 (教育学部初等教育開発講座准教授)

島根大学生: 島根大学生全体に参加を呼びかけ, 特に繰り返し, 積極的に参加した学生が 36名 (その大多数が教育学部初等教育開発専攻の 2 回生)

2. 「受入れ」プログラムの内容

1) 合同講義

本協働学修の大きなテーマとして取り上げられたのが、大学教育のグローバル化であった。ミシガン州立大学の Dr. Wong 准教授と島根大学の香川准教授とが合同で行う講義の中で、日米の学生は、グローバル化の定義について議論したり、グローバル化の必要性そのものについて検討したりした。

宿泊を伴う三瓶研修での合同講義では、教師の役割・教師としての子どもとのかかわり方を日米比較した。具体的な教師の行動や発話を例にとり、それが適切であるかどうか、子どもたちにどのような教育的影響を与えるかなど、グループに分かれて話し合いを行った。

また、3週間の研修中にミシガン州立大学生と島根大学生が協働で取り組む制作プロジェクトとして、島根大学の国際化をテーマとしたビデオ作成が課された。学生らは、グローバル化を成り立たせる要素を議論しながら日々収録を行い、プログラムの最後には、学長と国際交流センター長を迎えて、本協働学修事業の報告会を行い、制作ビデオの紹介を行った。

2) 現地校・文化施設見学

ミシガン州立大学と本学の学生が合同で現地の幼稚園、小学校、高等学校を訪問した。施設見学をして、園児や生徒と触れ合いながら、学校の様子などを訪ねる他、カリキュラム、教育者の仕事内容、サポート体制、地域とのかかわり、などについての説明を受けた後、その内容について、現地校の教員と議論を行った。大社高等学校では、高校2年生40名が、ミシガン州立大学生7名と島根大学生教育学部生4名に、ミシガン州立大学 Wong 准教授と島根大学香川准教授による、2時間の合同講義に参加した。現在の学校図書館の問題点を考え、生徒が利用したくなる学校図書館を再構築・デザインすることを課題に、高校生と留学生が混合したグループに分かれてディスカッションを行い、発表を行った。島根大学生は各グループをまわり、話し合いを深める補助を行ったほか、必要に応じて通訳を介した。

3. 「受入れ」プログラムの成果と課題

1) プログラムの成果

(1) 教育観の相対化

合同講義の内外で、文化の学校教育への影響について討論する機会が多く、両大学の学生は、自国の文化やその中に存在する教育の在り方について、文化の違う他者から意見を聴くことが出来た。その結果、自国の教育の在り方・教育観が唯一の在り方ではないと気づくと同時に、多くの文化を超えた共通点があることにも気づいた。また、その違いについて議論を重ねるうちに、自らの学校教育に関する考えを分析し直す学生の姿も見られた。

(2) 学部・大学全体への波及効果

特に顕著に表れた成果として、プログラム参加学生のグローバル化が、未参加学生に波及されたことがある。受入れプログラムでは、本学を拠点に行うことで、海外研修には全く興味になかった

学生、または、興味はあっても経済的な理由などから参加することのできない学生に対しても、いわゆる国内留学の環境を提供することが出来た。研修中から、このプログラムについての感想や体験談が学生の間で話題として多く上がるようになり、プログラムに直接関わる機会のなかった学生にも、国際連携した教育活動の概念が具体化し、身近な存在と変化していった。さらには、この「受け入れ」プログラムへの参加をきっかけに、本プロジェクト「送出し」プログラムへ参加を希望する学生が増加しことから、この成果の現れが見える。

2) 今後の課題

今後、この協働学修プログラムの取り組みと成果を国際連携に関する学会等で発表し、他大学にも本プログラムへの参加を呼び掛けたい。数年後には、複数の大学が島根大学に集まり、協働学修プログラムの拠点となるような島根大学を目指す。この件に関しては、本学学長も同席した、両大学の国際連携について話し合う会議の中で、今後の今プログラムの展望として提案しており、協議された。

本プログラムを発展させるに当たり、本学の受け入れ態勢を整えていく必要がある。学生教育に関しても、文化や第一言語の異なる他者とも活発なディスカッションが行えるよう、普段から、あらゆる事柄に関して自らが能動的に考え、その考えを他者にわかりやすく伝えるコミュニケーション能力も高める取り組みを行う必要がある。

4. 「送出し」プログラムの概要

1) プログラムのねらい

本学の教員と学生がミシガン州立大学を訪問し、協働学修を行う「送出し」事業は、現地の初等・高等教育機関で教育の在り方や教育方法について文化的な要素を考えることで、グローバルな視野を広げるとともに、自己や物事を多角的に分析できるようになることを目的としている。

2) 日程

2014年2月12日(水)～3月5日(水)

日付	概要
2013年10月～ 2014年2月	島根大学生向け事前講義：異文化間コミュニケーション学、授業計画
2月12日(木)	成田発、ミシガン州立大学着
2月13日(金)	オリエンテーション、キャンパスツアー
2月13日(金) ～2月15日(日)	ホームステイプログラム
2月16日(月)	合同講義：家族生態学・日米比較

	MSU 児童発達研究所 Haslett 校見学 歓迎会
2月17日(火)	合同講義：教師教育 MSU 児童発達研究所 East Lansing 校見学
2月18日(水)	合同講義：家族生態学・日米比較 現地公立小学校見学 島根大学生による，日本文化特別授業
2月19日(木)	合同講義：教師教育
2月20日(金)	文化交流
2月21日(土)	日本人学校補習授業校デトロイト校見学
2月22日(日)	食の交流会
2月23日(月)	合同講義：家族生態学・日米比較 現地公立小学校見学 島根大学生による，日本文化特別授業
2月24日(火)	合同講義：教師教育 ひのきインターナショナルスクール OpenHouse 参加 島根大学生による，日本文化特別授業
2月25日(水) ～2月26日(木)	シカゴ研修
2月27日(金) ～3月1日(日)	異文化間コミュニケーション合宿
3月2日(月)	合同講義：家族生態学・日米比較
3月3日(火)	合同講義：教師教育 送別会
3月4日(水)	出国《翌日日本着》

3) 内容

合同講義への参加，現地校・文化施設見学，現地校での特別授業

4) 参加者

島根大学教員： 香川奈緒美（教育学部初等教育開発講座准教授）

島根大学生： 教育学部生 9名，法文学部生 3名，生物資源学部 1名

ミシガン州立大学教員：Dr. David Wong（教育心理学・グローバル教育）

Dr. Yuya Kiuchi（家族生態学）

Mr. Alan Wu（教育学部大学院生・プログラム運営補助）

テキサス大学生： 2014年5月に島根大学で研修を行った7名と，2015年5月に島根大学で研修予定の学生が中心となる約20名程度

5. 「送出し」プログラムの内容

1) 合同講義

ミシガン州立大学の2種類の既存の講義に、本学の講義を組み込む形で合同講義を行った。具体的には、Dr. Kiuchiが担当する、一般教養科目群・家族生態学の講義と、Dr. Wongらの教育学部の教員3名が担当する、グローバル教師教育の講義に参加した。

家族生態学の講義では、大学生活、家族の在り方、仕事と家庭のバランス、友人関係、恋愛関係、などを社会学・生態学の視点から日米比較した。ミシガン州立大学生と本学の学生とが小グループに分かれ、それぞれのテーマに従って、文献調査、ディスカッション、ポスター・プレゼンテーションを行った。本学の学生には、米国人学生の視点から見た日本の文化、人間関係構築の方法などを、文献からの情報と自らの体験とに照らし合わせ、自分の意見をまとめ、さらには、発表をすることが期待されていた。

グローバル教師教育の講義では、米国の教育が留学生にどのような認識をされているのか、またその問題点などを扱った。本学の学生には、インタビュープロジェクトが課され、自らの米国の大学教育に関する固定概念、また、その根拠と妥当性を、ミシガン州立大学生へのインタビューを行い、検証した。自分の意見の根拠について深く検討すること、また、他者の意見を参考にして自分の意見を創り上げていく作業に苦勞する姿が見られたが、この課題に取り組むことで、学びの姿勢そのものも獲得している様であった。

2) 現地校・文化施設見学

ミシガン州立大学の講義に参加するほかに、現地の公立小学校を2校訪問・見学をした。それぞれの学校で、日本語の授業を見学し、その後、本学の学生が日本文化に関する講義を行い、生徒や教員と協議をする時間を設けた。

学校の選択方法として、ミシガン州立大学周辺にある小学校に呼びかけ、本学の学生の訪問を歓迎する教員の所属する学校の授業を見学させてもらう形をとった。そのため、ごく一般的な公教育の現場を見学することが出来た。教員の発言や指示を完全に無視する生徒の姿や、生徒から本学の学生に対する質問内容に、かなりのショックを受ける学生もいたが、この経験から、社会の仕組み、学校と社会との関係や地域社会とのつながり、教員の立場など、考えさせられることは多かったようだ。

3) 日本人学校訪問・特別授業

日本の学校カリキュラムに従った教育を行い、外国で日本の学校環境を保つ日本人学校補習授業校を訪問した。授業中や休み時間、昼食の様子等を見学したが、本学の学生にとって一番有意義であったのは、授業の合間や廊下などで行われた、補習校の教員・スタッフとの質疑応答であったようだ。

また、日本とアメリカの教育カリキュラムとを融合させ、さらに英語と日本語のバイリンガル教

育を行っているインターナショナルスクールへの訪問を行った。学生らは、カリキュラム融合やバイリンガル教育の意義や教育効果などについて熱心に聴くとともに、そこで働く教員の仕事などにも興味深く質問を繰り返していた。

6. 「送出し」プログラムの成果と課題

1) プログラムの成果

(1) 教育の相乗効果

ミシガン州立大学の授業に参加した学生が獲得したのものとして一番顕著であったのが、学びの姿勢である。本学初等教育開発講座に所属する学生は、これまで、何度も、予習の必然性、また、それを生かして講義中に考え、議論することの要性について、本学の講義の中で指導されてきた。学生は、その時の課題ひとつひとつをこなすためには十分な理解をしていたものの、この学びのサイクルの本当の意義や効果を理解していなかったと、自ら気づくことが出来た。また、このような教育を、どのように実現させるかという具体例を目の当たりにし、自分たちが教師になった時にも活用できる自信がついたと感想を述べた。

(2) 教育観の相対化

「受入れ」プログラムと同様、教育観を相対化につながる動きが見られた。アメリカでの教育制度や学校の在り方、また、海外から見た日本の教育制度について、講義中に課題論文などから学んでいた学生たちも、それが、その教育制度の中で働く教員や、その教育を受ける生徒にどのように受け止められているのかを学ぶことで、理解を深めることが出来た。さらには、ミシガン州立大学生とのディスカッションの中で、日本の教育が、アメリカ人学生にどう評価されているのかを学び、それが、自らの教育観を問いただす機会となった。

(3) 学部・大学全体への波及効果

「受入れ」プログラム同様、「送出し」プログラムに参加できなかった学生への教育の波及効果が見られた。テキサス滞在中から、ソーシャルネットワーキングなどを利用して、参加学生が体験や新たな気づきを、未参加学生に情報提供していた。「受入れ」プログラムに参加した本学学生は特に、本学からの参加学生のみならず、今や自分の友人であるテキサス大学生からも、「送出し」プログラムの様子を聴き、かなり積極的なネット上の意見交換が続けられた。

また、参加学生が、帰国後に、1・2年生向けの講義に参加し、プログラムへの参加を通じて得た新たな視点や日本の教育の課題点についてプレゼンテーションを行った。それは、参加学生にとって、新たな学びや経験の振り返りをする機会となり、また講義の受講生は、そのプレゼンテーションの情報を基に教育の在り方についてディスカッションを行い、教育観の相対化を行う1つの機会を得た。

2) 今後の課題

来年度以降の改善点として、研修の事前指導の方法を検討したい。本プログラムの特徴は、ミシ

ガン州立大学との合同講義を行うにあたり、研修の目的を参加学生それぞれが設定し、それを達成するために活動を行うことにあった。本プログラム全体としての趣旨は学生に伝え、参加を希望した学生に対しては、事前指導の中で、個々の興味関心や進路希望によって、具体的な達成目標設定をするように指導した。さらに、目標設定をした上で、参加者全員で行う学校訪問等のない自由研修時間の過ごし方や、特別授業の内容や指導案の検討に取り掛かった。多くの学生は、研修を通じて学びたいという意欲はあるものの、具体的に何について、なぜ学びたいのかを明確にするのに苦戦した。1 講義、1 研修からの学びが、大学生活全体の、また、もっと長い時系列上の学びへと繋がられるような意識を育てる学生教育が必要である。